

趣味と文学の狭間考

浮田 章 一*

はじめに

日本最初のエッチング〔腐食銅版画〕を制作された司馬江漢氏の『春波楼筆記』に「人は獣に及ばず」、と関心をひくエピソードを残している。英文学者、中野好夫氏はこのことを引用して「獣、いや、動物の方がはるかに美しい調和の中で生きているのではないのか。およそ世に人類ほど邪悪で、残忍で、貧欲な生物は、かつて存在もしなかったし、将来も断じて存在しえまいとさえ思える」、と語られている。

司馬江漢氏のことばを思い、中野好夫氏の感想を思うとき、人間は憎みあい、傷つけあい、動物も顔を背けるようなまねをしている。人は依然、獣に及ばないのかと、以前より動物に関心を抱き、動物飼育に明け暮れてきた私の人生を反省野鳥たちを中心に、そして飼鳥の趣味が、鳥と文学えの追想となり「趣味と文学の狭間」と題して話してみよう。

いえることは「つくりごと」が入っていないということだろう。「つくりごと」が入っているとはいけないと言うのではない。文学でもエッセイの中にもずいぶん「つくりごと」（フィクション）の入ったものがあり得ると思う。唯、ここではそれが入っていないのである。言及した人はすべて実在した人物であり、物と境涯とはことごとく体験したものである。間違いのない保証することは出来ないけれども、意識的に虚偽を述べたところはないと信じている。

私と一緒に谷崎潤一郎氏の作品を読んだり、谷崎氏の「文章読本」に関する私の講義を聴いてくれたりした学生たちの中には、教室以外、あるいは研究や論文以外のところで私は何をしていたかということに好奇心を感じている人もあると思うそれらの人々に対して、これが私の写真に代るものともなればとのぞんでいる。

(一)

私は生意気な生徒であり学生であった。読書人の生涯は書物に規定せられる。書物を選ぶというけれども、実は書物に選ばれている場合の方が多いうのである。

「私は他人の思索の中で一生を夢み過す。私は他人の心の中に私自身を失うことが好きだ。歩いていない時には物を読んでいる。落ち着いて考えることは出来ない。書物が私の代りに考えてくれる。」と言ったのはチャールズ・ラムである。

私はラムほどの読書人でもなかったので書物に考を任せてしまうことなど出来なかったのである。

文学とは、本来自分の発することばに文学機能を発揮させることである。他人の作った文学作品を受け入れることは、他人の文学活動へのおつきあいにすぎない。おつきあいは第二義的なもので、第一義の文学活動は、あくまでも自分が作り出すものでなければならない。それは文学活動ばかりでなく総のことに言えると、

*東京情報大学教授

御題目を唱えながら、昭和14年「野鳥の会」に入会、今日に至っている。野鳥への新発見を夢みたのである。

「野鳥」雑誌、昭和15年6月号・16年8月号の中西悟堂氏の執筆になるように、高尾山・赤城山中にと野鳥を求めて跋渉した、今日のいわゆるバードウォッチングの初まりである。

零下何十度という北満の軍隊生活で踏み出した痔病は、それが戦争の後遺症となり野鳥観察の趣味も断念しなくてはならなくなったのである。

昭和22年末アメリカの教育使節団、日本語調査官ハルバン教授が来られた頃、オースチン博士も来日された、ある日、日本には国を代表する鳥、即ち「国鳥」があるのかというので、急遽「雄」を国鳥と選ばれた、その選者の一員として私も加わっている。只今の荳萬圓札の裏にはつがいの雉の図柄が印刷されているのは国鳥だからである。国鳥を一般の人に知らせたいこともあって、「国鳥キジ物語」（黒潮出版）を中西悟堂氏と共著で出版した。

野鳥への思いこみは激しくても戦争の後遺症は今も長く歩くことを許してくれない。私には敗戦は終っていない。バードウォッチングは駄目と諦め、一ヶ所にとどまって空を眺め、林の中に座してバードリスニングに野鳥への興味を覚えている。

歩行困難を押し切って登校する大学校庭の雑木林で鳴く藪鶯、頭上かなたで囀る雲雀、例の如く激しく翼を動かしながら上に向かって無軌道に飛んで行く。声を張り切って天翔ける小鳥の壮快な意気を讃えたい思いで一杯になる。かの「春琴抄」に現われる、春琴が愛した雲雀は春琴の眼には見えなかったであろう、張り切った声と、天翔ける小さな姿を臉の奥で追い続けたのではなからうか。ひとり空高く歌い出した小さな魂には凜乎とした犯すことの出来ないものがある。歌うために生れたこの鳥は春夏秋冬をとわず天気さえよければ年中歌い続けているのかも、飼育の雲雀も換羽時以外は小声で歌い続けている。ワーズワスが歌い、シェレーが

歌い、ジョージ・メレディスも歌ったスカイラーは日本の雲雀と殆ど同じものである。

長く歩くことの出来ない自分に腹だたしさを覚え、いとせめて「文学の中に探鳥」とを決心したのはいつ頃のことだったろう。小鳥を愛する思いが文学の中に入ったのである。

(二)

作家谷崎潤一郎氏の言語感覚の素晴らしさは、「文章読本」「私の見た大阪及び大阪人」「蓼喰う虫」に現われる描写の鋭どさによっても明白である。しかし芸術論を基調とした飼鳥、鶯の鳴きについての音感覚に言及したものは少い、それも人工技術による飼鳥の鳴かせ方、鳴き声の聞き方を例にとったものは皆無といってよいだろう。「春琴抄」にはそれを微細に書き記されている。人工的飼鳥の鳴かせ方、生き物を素材とした芸術論。春琴が「天鼓」と名づける二代目の鶯を愛して言ったことばを、作者は「春琴伝」で次のように述べている。

「二代目の天鼓も亦その声靈妙にして迦陵頻迦を欺きければ日夕籠を座右に置きて鍾愛すること大方ならず、常に門弟等をして此の鳥の啼く音に耳を傾けしめ、然る後に諭して曰く、汝等天鼓の唄ふを聴け、元来は名もなき鳥の雛なれども幼少より練磨の功空しからずしてその声の美なること全く野生の鶯と異れり、人或は云はん、斯くの如きは人工の美にして天然の美にあらず、谷深き山路に春を訪ね花を探りて歩く時流れを隔つる霞の奥に思ひも寄らず啼き出でたる藪鶯の声の風雅なるに如かずと、然れども妾は左様に思はず、藪鶯は時と所を得て始めて雅致あるやうに聞ゆる也、その声を論ずれば未だ美なりと云ふ可からず、之に反して天鼓の如き名鳥の囀るを聞けば、居ながらにして幽邃閑寂なる山峽の風趣を偲び、溪流の響の潺湲たるも尾の上の桜の靉靆たるも悉く心眼心耳に浮び来り、花も霞もその声の裡に備はりて身は紅塵万丈の部門にあるを忘るべし、是れ技工を以て天然の風景とその徳を争ふもの也音曲の秘訣も此処に在りと。又鈍根の子弟を恥ぢし

めて、小禽と雖も芸道の秘事を解するにあらずや汝人間に生れながら鳥類にも劣れりと叱咤すること屢々なりき」(角川文庫)

この説は「音曲の秘訣」を唱えながら、実は春琴の口をかりての氏の文学論・芸術論である。勿論「春琴抄」の主題は、春琴が美貌を破壊され、佐助が彼女の不幸に殉じて、目をついて自から盲目となるところである。氏の文学論・芸術論を展開するに当って、なぜ飼鳥を素材にしたのだろうか。

谷崎氏の鶯の鳴かせ方、その鳴き方についての原文を引用しながら考証してみよう。

「女で盲目で独身であれば贅沢と云っても限度があり美衣美食を恣にしてたかが知れているしかし春琴の家に主一人に奉公人が五、六人も使われている月々の生活費も生やさしい額ではなかったなぜそんなに金や人手がかかったかというとその第1の原因は小鳥道楽にあった就中彼女は鶯を愛した。今日啼きごえの優れた鶯は1羽1万円もするのがある往時といえども事情は同じだったであろう。もっとも今日と昔とでは啼きごえの聴き分け方や玩賞法が幾分異なるらしいけれども先ず今日の例を以て話せば①『ケツキヨ、ケツキヨ、ケツキヨケツキヨと啼くいわゆる谷渡りの声』、②『ホーキーベカコンと啼くいわゆる高音』、③『ホーホケキウの地声』の④外にこの2種類の啼き方をするのが値打ちなのである』これは『藪鶯では啼かないたまたま啼いてもホーキーベカコンと啼かずにホーキベチャと啼くから汚い』、⑤『ベカコンと、コンという金属性の美しい余韻を曳く』ようにするにはある人為的な手段を以て養成するそれは藪鶯の雛を、まだ尾の生えぬ時に生け捕って来て別な師匠の鶯に付けて稽古させるのである尾が生えてからだ親の藪鶯の汚い声を覚えてしまうので最早や矯正することができない。師匠の鶯も元来そういう風にして人為的に仕込まれた鶯であり有名なのは「鳳凰」とか「千代の友」とかいったようにそれぞれ銘を持っているされば何処の誰氏の家にはしかじかの名鳥がいるということになれば鶯を飼って

いる者は我が鶯のために遙遙とその名鳥の許を訪ね啼き方を教えてもらうこの稽古を声を付けて行くといふ⑦大抵早朝に出かけて幾日もつづける。時には師匠の鶯の方から一定の場所に出張し弟子の鶯共がその周囲に集まりあたかも唱歌の教室の如き観を呈する勿論箇々の鶯によって素質の優劣声の美醜があり、同じ谷渡りや高音にも節廻しの上手下手余韻の長短等さまざまであるからよき鶯を獲ることは容易にあらず獲れば授業料の儲けがあるので価の高いのは当然である。春琴は我が家に飼っている1番優秀な鶯に「天鼓」という銘をつけて朝夕その声を聴くのを楽しんだ⑧天鼓の啼く音は実に見事であつた高音のコンという音⑨の冴えて余韻のあることは人工の極致を尽くした楽器のようで⑩鳥の声とは思われなかったそれに声の寸が長く張りもあればつやもあつた』されば天鼓の取り扱いにはなほだ鄭重で食物の如きも注意に注意を加えさせた普通鶯の擦り餌を作るには大豆と玄米を炒って粉にしたものへ糠を交えて白粉を製し、別に鮎や鰻の干したのを粉にした鮎粉というものを用意してこのふたつを半々に混じ大根の葉を擦った汁で溶くなかなか面倒なものであるその外声をよくするためには藁蓐という蔓草の茎の中に巢食う昆虫を捕って来て日に1匹或いは2匹ずつ与える斯くの如き手数を要する鳥を大概五、六羽は飼育していたので奉公人の一人か二人はいつもそれに係りきりであつた。」(角川文庫)(二重括弧並びに①から⑩までの番号は当方にて記入した)

先に引用した「春琴抄」の中の鶯のその鳴きについて考えてみよう。

①『ケツキヨ、ケツキヨ、ケツキヨケツキヨと啼くいわゆる谷渡りの声。』とあるが、声付けの関西口では、そんな谷渡りの声ではなく、必ず一音で「キ」に近い連続音を発する。

②『ホーキーベカコンと啼くいわゆる高音。』は「ホーチッチーベカコ」と啼いて「ン」の音はない。

③『ホーホケキウの地声。』とあるのも、「ホーホケキウ」という地声は全く鳴かない。

④『外にこの2種類云々。』とあるのは、何かの間違いであって、関西口の鶯は、高音と下げの2種(二ツ音)だけで、驚いた時に谷渡りをする。即ち、中音はないのである。下げ鳴きは「ホホホーベカコ」と鳴く。

⑤『藪鶯では啼かないたままた啼いてもホーキーベカコンと啼くから汚い。』藪鶯の場合は示されたような鳴きは間違っても鳴かない、「キー」の音を発しないのである。そして三ツ音(上・中・下)の揃っているのが普通である。

八王子市高尾山中で藪鶯(春・夏は山にいて秋10月初め頃山から都会において庭先の生け垣で笹鳴する鶯)の声を録音した。それを国立国語研究所・言語行動研究部第3研究室にてソノグラフに撮ったことがある。鳥には声帯がなく鳴管によって鳴くから鳴紋ともいふべきものである。ソノグラフには3つの音の藪鶯の鳴紋が写し出された、即ち1Kヘルツと2Kヘルツの間にひとつの異なる段差を読み取ることが出来る、つまり3つ音が表出されたのである。

京都市・北山、長野県のカヤノ平、戸隠などで4月から6月にかけてテント生活をしながら10数羽の鶯を捕獲し、足輪に標識を付けて放ち、あとは指向性マイクを使い、どういう場所でどんな行動をしている時にどうさえずるかを記録する京都大学の百瀬某氏、その後山階鳥類研究所から去る平成3年11月9日、サウジアラビア、湾岸被害鳥類調査に出発されている。氏は沢山の霞網をバックにつめて出掛けられた。この鳥類学者は鶯のさえずりがかつてソノグラフで解説されている。

声紋の特徴から、さえずりの音程が高いH型と音程が低いL型の2つに分けると分類されているのだが、藪鶯の場合は先に述べたように3つのはっきりした鳴紋がソノグラフに現れている。

氏の解説では、H型、ホーホケキョ・L型はホーホホケキョの2つ音になるが、実際は、H型より高い、ヒーホケキョと鳴く音がある。関東では昔から、ヒーホケキョ・ホーホケキョ・ホーホホケキョが3つ音の揃った藪鶯と

して尊重されてきた。H型・L型の2つの使い分けではない。2つに分けてのさえずりをしたのは関西口の飼育で声付けされた、春琴がこよなく愛した「天鼓」である。関西口鶯の鳴きはビクターレコード自然科学盤・藪鶯の鳴きはコロムビアレコード盤にそれぞれ吹き込まれている。

⑥『ベカコンと、コンという金属性の美しい余韻を曳く。』とあるが、「というところは余韻はあっても金属性ではなく、「ホーチッチーベカコ」の「チッチー」の音が金属性でしかも力強く長く鳴くのである。以上が関西口鶯の鳴き方であって、谷崎氏の聞き方は間違いか、実際にはほんの少し聞いて、人からのうけうりではなかろうか。

⑦『大抵早朝に出かけて幾日もつづける。』これは鶯の雛によって日数の長短をきめる。稽古はおぼえの早い雛で5日、長くて10日間ぐらいである。紙縊を10数本持参して、教師鳥の高音を今日は何回聞かせるかを先ずきめておき教師鳥が高音を鳴くたびに紙縊を折って雛にきかせた高音の数を知るのである。授業を終え家に持ち帰った雛は、すぐに教師鳥の鳴きを真似てグゼリ(小声でグズグズ喋ること)だす。そのグゼリによって次の日の高音の聞かせる回数をきめるのである。人間の学校風景と同様、上手に鳴くようになる雛は静かに教師の鳴きに耳を傾けているが、駄目なのは授業中にグゼリだす。そのような鳥はすぐに退場させられるのである。教師の鶯は早朝か夕まずめに力のある鳴きをするもので従って夕方にも弟子鶯にその鳴き方を聞かせることをする。

⑧『天鼓の啼く音は実に見事であった高音のコンという音。』これは高音の「チッチー」という音でなければならない。

⑨『鳥の声とは思われなかったそれに声の寸が長く張りもあればつやもあった。』これも「チッチー」の音のことで、声の寸が長く張ることを「畳一丈」を鳴くと関西の愛鶯家達はいっている。

野鳥たち、(鶯・頬白・駒鳥・雲雀など)に声

付けしたのを芸術と呼ぶとしたら過去には盛に行われている。過去に経験した者が飼鳥や声付けの方法を正しく書き残して置くのも必要ではないだろうかと私なりに飼鳥・声付けを中心として「鳥・鳥・鳥そのエッセイ」(笠間書院)を残した。それは、有名作家の誤った聞き方が素材となって作家の作品に使用されたら、その事実がよし間違っているとも何時かは真実になるのではと危惧の念をもつからである。

百瀬某氏の声紋調査、H音とL音の2音を鳴く鶯はあたかも、谷崎氏の「春琴抄」に表われる「天鼓」のような鳴きそのものの鶯である。

(三)

子供の頃に歌った童謡は、成人になってからも懐しさと心の和みを与えてくれる。その童謡歌詞に誤りがあれば、一生その誤りを背負ってしまうであろう。

「お猿のかごや」・「あの子はたあれ」・「見てござる」など沢山の子供たちに歌われてきた童謡は海沼実氏の作曲になるものであるが「からすの赤ちゃん」は、海沼実氏が作詞・作曲された唯一の童謡といってよい。それは昭和17年、飯田景応氏の編曲、勝部みどり氏の歌唱で発表されている。当時は子供の生活も、文化もすべてが国家と戦争に結びつけられ、「欲しがりません勝つまでは」のスローガンの下、全国民に耐乏の生活を強制した時代である。しかし彼は人の持っている物をなんでも欲がる幼児の気持を色々の動物に寄せて表現するため、矢島邦子という女性のペンネームを使ったのである。従ってこの童謡のように見るもの聞くものすべてが欲くなる歌は余り歌われなかったのである。昭和23年5月、戦争も終り平和の兆しが現れた頃、作詞者の矢島邦子を海沼実に訂正して発表した。日本人なら誰もが1度は口ずさんだと思われる。その童謡に誤りがあると指摘されたのは、山口伸美氏である。氏は、

「コケコッコは、おじさんだ、と言われてる。

からすの赤ちゃん なぜ鳴くの

コケコッコのおばさんに
赤いお帽子 ほしいよ
赤いお靴も ほしいよと
かあかあ 鳴くのね

「コケコッコ」は、夜明けを告げるニワトリの声。いわゆる「時をつくる声」である。ふつうは、「コケコッコ」であるが、リズム・音数の都合上「コケコッコ」なのであろう。

子供の頃、この歌が好きでよく歌ったのだが、考えてみると、ずいぶん實際を無視した歌詞である。

「コケコッコのおばさん」とあるから、メンドリのことらしいが、メンドリは、ふつう時をつくらない。「コケコッコ」の時をつくるのは、オンドリである。

また、「赤いお帽子」といわれるような真赤なトサカを持つのも、オンドリである。

だから、実際には、「コケコッコのおばさん」ではなく、「コケコッコのおじさん」としなければならない。けれども、「コケコッコのおじさんに」と歌ってみると、全く違ったイメージの歌になってしまい、童謡ではなくなってしまいそうだ。この際、実際とは違っているものの、「コケコッコのおばさんに」として、詩情を重んじることにしよう」と。「ちんちん千鳥のなく声」(大修館書店)。

ニワトリの鳴き声でこう結論を急ぐのはどうだろう。鳴き声についての考証は問わないで、当時の飼鳥の関係についていってみると、昭和10年前後より、採卵鶏として多く飼養されていたのは、プリモースロック・ロードアイランドレッド・ニューハンプシャに名古屋コーチンである。

白色レグホーンは明治20年に已に輸入されていたが、大正10年以来本格的に輸入されるようになり採卵鶏として他を圧して広く飼養されるようになり、至る処で見受けられた。一面やかましく人に馴れにくいニワトリであった。驚いて逃げる時の鳴声は何とも言えないが、白色レグホーン種の雄の冠は単冠で先が五歯に別れて大きく直立し、雌の冠は他のニワトリと比格し

て大きく形が当時流行の帽子レグホンストロに似ているところから「コケッコのおばさん」は白色レグホーンの雌を海沼氏が観察して言ったのだらうと思われるから、おばさんであってよい。問題なのは、からすのあかちゃんが、ほしがった、「赤いお靴も ほしいよ」と鳴く、赤いお靴は、やはりニワトリのお靴であって、これはニワトリの赤い足のことだらうが、赤い足のニワトリはいない。赤い足をもつ鳥は、キョクアジサシ、ユリカモメ、アカアシシギ、アカアシ熱帯鳥、ヤンバルクイナなどである。それなのにどうして海沼氏は赤い靴といったのだらうか、名古屋コーチンの足色は鉛色だし、ロードアイランドレッドも赤色ではない、白色レグホーンは黄色で、ニューハンプシャはすね及び指は赤褐色であるから、この足を見て赤いお靴といったのだらうか。

谷崎潤一郎氏は「文章読本」でこのように言っている。

「言語と云うものは案外不自由なものでもあります。のみならず、思想に纏まりをつけると云う働きがある一面に、思想を一定の型に入れてしまうと云う缺点があります。たとえば紅い花を見ても、各人がそれを同じ色に感ずるかどうかは疑問でありまして、眼の感覚のすぐれた人は、その色の中に常人には気が付かない複雑な美しさを見るかも知れない。その人の眼に感ずる色は、普通の「紅い」と云う色とは違うものであるかも知れない。しかしそう云う場合にそれを言葉で現わそうとすれば、とにかく「紅」に1番近いのでありますから、やはりその人は「紅い」と云うでありましょう。つまり「紅い」と云う言葉があるために、その人のほんとうの感覚とは違ったものが伝えられる。言葉がなければ伝えられないだけのことでありますが、あるために害をすることがある。一中略一返す返すも言語は万能なものでないこと、その働きは不自由であり、時には有害なものであることを、忘れてはならないのであります。」と海沼氏は赤褐色のニューハンプシャの足の色と白色レグホーンの足の色という異なるニワト

リを見て作詞したのだらうか。大学の学生たちに、赤い足のニワトリを見つけたら是非知らせてくれるように注文したが、未だ誰も見た者はなさそうである。

「からすの赤ちゃん」・野口雨情の「七つの子」など童謡に出てくるからすは可愛い可愛いからすなのに「秋田県由利郡象潟町では捕獲したからすの肉を町の特産品として売り出す計画をすすめている由」、1991年11月14日、毎日新聞に掲載されている。そのからすはまさに「からすなぜ泣くの」である。

野鳥たちを愛し、愛するということは野鳥の生態を知ることが先決である。それには飼育して観察し、どんな地鳴きでも野鳥の種類を聞き別けることのできる努力と野鳥を愛し続けること。「持続は力」と云うように学問でも趣味でも永く続けることが大切で、それによって趣味性を発揮することが出来るのではないだらうか。

(四)

「万葉集」「古今和歌集」に散見される鳥名が今日現存する鳥の名と一致するものか、それとも全く違った鳥を指しているのか、また何鳥のことを詠んでいるかという考察は案外古くから試みられている。それら古文獻による諸説並びに、東光治氏・川口孫治郎氏・房内幸成氏・細野善鬼氏の説を参考引用しながらもう一度私見を述べてみよう。現地に歩行困難をおして数度足を運びその結果自然の諸相が「太陽のもと新しきものなし」というような感を覚えさせられた。

古典の歌の中、ここでは「万葉集」「古今和歌集」に出てくる二・三の鳥名について考えてみたいと思う。

柳田国男氏、野鳥雑記、「鳥の名と昔話」には、『鳥類は昔の方が数も多く、永く続けて啼き、人のその声に耳を傾けておる余裕も、たしかに今よりは多かつただけでなく、それに何等かの意味あるものと解して、名称をその間に求めようとした念慮も、古人は我々よりも遙かに強烈なものを持っておったのである』と述べられている（傍点浮田）。鳥の称呼、しかも数多

い鳥名も、

- (1) 鳥の鳴き声から名付けられたもの
- (2) 鳥の習性（食性も含む）から名付けられたもの
- (3) 鳥の形態（色彩も含む）から名付けられたもの

この3条件にもとづいている。

人間と動植物との係わり合いの深さは、「ツバメ低く飛べば雨近い」「ガンの行列南へ行けば寒さ強まる」「カエルが地ぎわで越冬するときは冬暖かい」「朝クモ巢にかかった水滴はその日晴の証拠」などといった時代的に新しいことわざではあるが現在も使われている。又、気象庁天気相談所では動植物の動きを通して生物季節観測による気象状況の変化をつかむことを目的にしている。それは気象台ができる前の明治13年、内務省地理局測量課が出した気象観測法にも、動植物の動きを追うよう指示され、明治時代から観測が続けられ現在も気象庁産業気象課では27種の動物と33種類の植物を指定して観測が進められていることによってわかる。動植物などが、どのように生活の場を追われているかという調査は環境庁にはなく、気象庁のような生物相全般にわたる消長をつかめる調査は、自然が急速に失われていく現在では貴重なデータとなる。そして、気象庁の観測にみられるように、一部で増えたり、復活した生物はあるものの、生物全体では種類や個体数が減っていることは事実で、数年前、コウノトリが絶滅したのをはじめ、以前数百万羽も渡来したアホウドリは最近ではわずか6・70羽、沖縄産のダイトウミソサザイも、絶滅したほか、平地部では20から30種の鳥がほとんど、あるいはまったく繁殖しなくなったということである。環境庁鳥獣保護課の友田安雄氏は、ホテルが戻ったりするのは、農薬という有害因子がとりのぞかれたためだろうが、それはごく一部の現象で、全般的には埋立や宅地造成で鳥獣の生息環境がどんどんなくなっており、このような失地は絶対に回復することはないと語っている。(1976・9月1日毎日新聞夕刊)即ち、生活の場を奪われ

たからにほかならないのだから、急速に失われてゆく動植物を少しでも失われない先に古典の歌の中の鳥名と現存する対象鳥名とを求めるのもまた必要ではなかろうか。

古今和歌集中の解釈に関する秘事の伝授を古今伝授といって、その中に「三鳥ノ大事」として、喚子鳥・百千鳥・稲負鳥とするものが挙げられている。これは、鎌倉後期、定家の子孫が二条家・冷泉家に分かれ和歌の師範家となり、吉野朝から一定の儀式項目を一子相伝に授ける風の生じたのが起源である。其の後にはただ「秘す可し」で一般の人には知らせてはならないものと考えられるようになった。そして、二条家相伝の秘事である三鳥伝には「相伝に曰、喚子鳥は春の物也、唐土にて喚起鳥とて春の中つ方鳴く鳥にて詩にも作る也、我国に云ふは（ツツ鳥）の事なり、つつつつと親鳥の子を呼べば、その声を聞きて子鳥の来る故に呼子鳥と云ふ、また（年寄来よ来よ）と鳴く鳩をも云ふ、是は子が親を呼ぶ心なり、但し古今集なるは猿を詠めり、また山彦をも云ふ事あり、是れ極めたる秘事なり」とある。又、文明4年、一条兼良から姉小路基綱に伝えた古今三鳥直伝には、「古今三鳥の中にしては、呼古鳥一鳥にて済むべき也、古へより此三鳥の実在治定せず、治定せぬを以て口伝とする也、抑々鳥にして其の名のあるもの、人に知られず、世に現はれざるは無きに、此の三鳥に限りて名あれども姿の隠れたるに仔細ありと知るべし……中略……然れども1名を定むる時は、百千鳥＝鶯・呼子鳥＝ツツ鳥・稲負鳥＝鶺鴒、斯様に心得侍るべし……中略……呼子鳥の本躰を知る時は、猿をも鹿をも詠むべき也、古歌に証歌多し、所詮、呼子鳥は一切の声ある物の惣名なり、名の知れぬ鳥は皆呼子鳥なるべし……中略……即ち春は百千鳥、秋は稲負鳥、四季おしなべては呼子鳥と云ふべし也」とある。(傍点浮田)

この古今伝授のいわゆる三鳥をそのまま承服してよいものだろうかと疑問を提起したくなる。稲負鳥が鶺鴒とあるが、契沖「万葉代匠記(-)」に『奥義抄の稲負鳥の注の終に云ふ、順がわかま

へざらむ事を今の世に定めがたし。顯昭の古今集抄同鳥の注の終に、定家卿密勘云、稻負鳥、先人説これに同じ、愚意今按ずるにぞ猶庭たたきにやと思ひ侍れど、無_ニ差証_ニ同_ニ清輔朝臣_ニ。是は上の奥義抄に同心し給へり。八雲御抄に、古今の稻負鳥の鳴くなべにと云ふを引かせたまひて、是も何れの鳥と心得がたし、但定家卿説可_ニ正説_ニ、彼の鳥のなく時人の家々に稻と云ふ物を負ひて入る也、仍号_レ之。是は定家卿も何れの鳥とは定めずながらいなおほせと名付くる由をのみ釋したまへるなり。是はさも有るべき事なり』とある。この定家説を後世の人もならって稻負鳥を田夫であるというが、およそ田夫と庭たたき（石たたきともいって鶺鴒のこと）では大きい違いである。試みに稻負鳥の詠まれている「古今和歌集」中の歌を挙げてみると、

わが門に稻負鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は来にけり

山田守る秋の仮庵に置く露は稻負鳥の涙なりけり
の、秋上・秋下の2首で他には見受けられない、現存の何鳥に当たるかを方言上から考証してみると、絶滅寸前の朱鷺鳥であることを述べる事ができる。ただ古今和歌集の同一の歌中に2種類の鳥が詠みこまれているようなことはない、発表後に気付いたことではあったが、雁と朱鷺が同時に現われても不自然さはないと思われる。それは雁は「渡り鳥」で朱鷺は「留鳥」であるからで、歌人が写真のままに詠んだものであるとするなら了承できるのではなかろうかとも考えられる。

「万葉集」巻12、3092の歌に
しらまゆひだのほそえのすがどりのいもにこふれかいをねかねつる
白檀斐太乃細江之菅鳥妹尔恋哉寐宿金鶴

という歌が詠まれている、この「すがどり」は万葉に現われてくる「やさかどり」と共に万葉集には一度しか詠まれていず、いまだ明白な対象鳥名はない。それは「真鳥」について古来諸説がありながら満足な解答が与えられていないと同様である。ここでは白檀の歌に現われている「菅鳥」について諸説を挙げながら考えてみ

たいと思う。稻負鳥では田夫と鳥といったような甚しい論議の隔りはあるが菅鳥については一応鳥であることに於いて異論はない。真淵以来万葉学者の間では、菅鳥は管鳥の誤りではないかといわれてきた。その理由はよくわからないが、この3092の歌の前、3090の歌に、

葦べゆく鴨の羽音の音のみに聞き管もとな恋ひわたる鴨

と、管の字が使われているからだろうか、つまり「聞き管もとな恋ひわたる鴨」の管があるから筒との誤りを真淵らが犯し筒鳥ではないかといっている。

ところで漢字の菅と管は似た字であるので筆写にあたって誤写するという可能性がありはしなかったか、しかも前述したように本歌より2つ前の歌でつつと訓ませているために情性で書き誤るということはなかったか、仮りに誤られたものとして、原字の管（ツツ）鳥と考える時、人は杜鵑科のツツ（筒）鳥の方を考えてしまったのではなかろうか、筒鳥ということになると、古今伝授の三鳥のひとつ喚児鳥（呼子鳥）ということになる。一方、古今伝授では啼鳴する総ての鳥ともいっている。

喚呼鳥は「万葉集」では

大和には鳴きてか来らむ喚呼鳥象の中山呼びぞ越ゆる（巻1、70）

神奈備の岩瀬の杜の喚呼鳥いたくな鳴きて吾が恋増る（巻8、1419）

よのつねに鳴くは苦しき喚呼鳥声なつかしき時にはなりぬ（巻8、1447）

滝の上の三船の山ゆ秋津辺に来鳴きわたるは誰喚呼鳥（巻9、1713）

吾背子をな巨勢の山の喚呼鳥君喚びかへせ夜の深けぬとに（巻10、1822）

春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰喚呼鳥（巻10、1827）

答へぬにな喚び響めぞ喚呼鳥佐保の山辺を上り下りに（巻10、1828）

朝霧にしめぬにぬれて喚呼鳥三船の山ゆ鳴き渡る見ゆ（巻10、1831）

朝霞八重山越えて喚孤鳥呼びや汝が来る屋戸

もあらなくに (巻10、1941)

以上9首詠まれている。そして古典の書物などでは喚呼鳥を何の鳥とっているかについてみると、現存最古の本草書である、本草和名、深根輔仁 延期年間 (903) には呼子鳥は出ていないが、和名類聚抄、源順 承平年間 (930) には「喚呼鳥、万葉集会、喚呼鳥、其読与不古止里」とあって、源順が果してヨブコドリを知っていたかどうか判断出来ない。後撰和歌集、春道列樹 天曆年間 (951) に、(よぶこ鳥を聞てとなりの家に送りける)

我宿の花になきそよぶこ鳥よぶかひ有りて君もこなくに

とある。後拾遺和歌集、藤原通俊撰 応徳年間 (1086) 能因法師、(法輪に道命法師の侍けるとぶらひにまかりたるによぶこ鳥のなき侍りければよめる)

我独さく物ならばよぶこ鳥二声までは鳴せさらし

とある。この二首は明らかにヨブドリを実地に聞いて詠んだ歌で、少くともこの時代までは呼子鳥が何物であったかを知っていたようであって別段説明を加えるまでもなくわかったものとして扱っていたのだろうと東氏は(続万葉動物考)で述べられている。字鏡集、菅原為長 寛元年間 (1245) ではホトトギス。夫木和歌抄、藤原長清撰 嘉元年間 (1310) は善知鳥(海鳥)と、そして、徒然草、兼好法師 嘉暦年間 (1330) には鶴鳥とあり、藻塩草、天文年間 (1533) ではツツドリ。多識篇、林羅山 寛永年間 (1630) はカッコウ・ツツドリを同一鳥。雑和集、寛永年間 (1641) はハト。万葉代匠記、契沖 貞享年間 (1690) では鶴鳥・鳩といてなお悩んでいる。和爾雅、貝原好古 元禄年間 (1694)・大和本草、貝原益軒 宝永年間 (1709)・和漢三才図会、寺島良安 宝永年間 (1712) ではツツドリ・カッコウを同一鳥として取り扱っているのは多識篇と同様である。滑稽雑談、四時堂基謄 正徳年間 (1713) は猿・山鳥・山つぐみ・鶯・郭公などと色々にしている。見聞談叢、伊藤梅宇 寛保年間 (1745) に

は滑稽雑談の猿・山鳥・山つぐみ・鶯・郭公と記してある。広太倭本草、直海元周 宝暦年間 (1755) では鶯音(支那の鳥名)とある。万葉考別記、賀茂真淵 宝暦年間 (1760) はカッコウとしてカッコウの形態までも説明している。年々随筆、石原正明 寛政年間 (1801) はツツドリでもよいがそうとも限らないとっている。本草綱目啓蒙、小野蘭山 享和年間 (1803) はツツドリとカッコウの違いを明確に区別してカッコウとっているようである。松陰随筆、鈴木基之 文政年間 (1820) では「何にても声立てよぶ鳥也」とある。紙魚室雑記、城戸千楯 天保年間 (1830) には特定の鳥名でなくて、親鳥の巢より呼なるをおしなべていうとある。比古婆衣、伴信友 弘化年間 (1847) ではホトトギスとある。以上年代を追って喚兒鳥は何の鳥かを見て来たのであるが、喚兒鳥の対象鳥名はいまだこのように明かではない。しかし現在の古典の注釈書などには喚兒鳥はカッコウという説が圧倒的である。例えば、「岩波古語辞典」(1975) には〈よぶこどり〉(呼子鳥)、鳴き声が人を呼ぶように聞こえる鳥。今のカッコウとするのが通説。他にホトトギス・ヌエ・ツツドリ・ワシ・猿などとする説がある。春または晩春の景物としてよまれるのが普通。カッコウ・ホトトギスなど、いろいろな鳥を含めての称かなどとあって、カッコウが通説であるかのように説かれている。「日本国語大辞典」(1976・小学館) には、よぶこどり〔呼子鳥・喚呼鳥〕《名》(鳴き声が人を呼ぶように聞こえるところからいう) 郭公(かっこう)の異称か。また、杜鵑(ほととぎす)のことともいう。《季・春》万葉一・70、高市黒人を挙げ、和名抄・観智院本名義抄・匠林集・俳諧・犬子集を挙げ、補注について鶯・筒鳥・五位鶯などとする説もあり、古くは猿とする考えもあったとあり、語源説として、ヨビコヒトリ(呼恋鳥)の義〔大言海〕、鳴く小鳥の義〔松屋筆記〕、人を呼ぶように鳴く鳥の義〔名語記・万葉考別記・俚言集覧・雅言考・嚶々筆語〕そして、ヨブコエトリ(呼声鳥)の義〔日本語原学=林壺臣〕又、ハコハコと鳴

くところから〔古今集注・滑稽雑談所引叢白抄〕を挙げ、ココと子どもを呼ぶように鳴くところから〔古今集注〕古辞書として、和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天王・鰻頭・黒本・易林・書言を挙げている。又、万葉古今動植正名では「よぶこどり、今名かむこどり、かつぼうどり（漢名鳴鳩）一名郭公」とある。東光治氏の続万葉動物考（1943・人文書院）では『山田孝雄博士・折口信夫博士の万葉集辞典・鴻巣博士の全釈・新村出博士・弥富破摩雄氏・豊田八十代氏・「古文学の研究」の坂井衡平氏などカッコウ説の学者が多いといわれている。東光治氏自身は、呼子鳥は一種の鳥名でない、少なくとも万葉時代の呼子鳥と後世の歌に詠まれている呼子鳥が同一種のひとつの鳥ではなく、ウグイスとかオシドリとかいう風に何か他のものと区別し易い特殊の特長を備えざる限りは、今日の分類学的学名からいえば総称たることが多い、その名の起源が古いほどその傾向も大となるといわれ、今日でも大抵の人はタンチョウでもナベヅルでも、時にはコウノトリやアヲサギまでも単に鶴と唱え、アヲゲラでもアカゲラでもコゲラでもただ木をつつ突く鳥なら皆啄木鳥と呼んでいるように人々の判断によって自分の聞いた鳥が人を呼ぶように思われた時にはこれを呼子鳥と呼んだのだ』といわれている。そして『万葉集の歌の（1419）・（1822）は恐らくカッコウかアオバトであろう、（70）・（1713）・（1831）・（1941）などの歌はゴイサギが1番適合していると思う』ともいわれている。

喚兒鳥についての新しい論として、「喚兒鳥＝筒鳥説への抵抗」細野善鬼（1976・「野鳥」・360号）がある。氏は先に、「万葉の喚兒鳥はカッコウではない」（1965・「野鳥」・230号）といわれ、カッコウ・ツツドリ説を否定してホトトギス説を唱えられている。何れにしても、喚兒鳥は何の鳥かということは今もって明白でない。そこで次のような仮説がたてられる、即ち喚呼鳥が筒鳥で、管鳥が菅鳥なら喚兒鳥は菅鳥となる。果してそれがよいのだろうか。菅鳥は一体何鳥に当るのか論議のおこるのもまた当然

ではなからうか。そこで万葉集の注釈本に当たてみると、

○万葉集注釈、澤瀉久孝著（中央公論社）には「菅鳥」も不明である。類聚名義抄（僧中）には「鷓鴣」に「アマトリ、スガトリ、菅鳥、家ハト」とあり、山崎美成の海録に葦切とし、天野政徳随筆(二)にもその説をあげて不定としている。東光治氏の「すが鳥考」（万葉動物考）では高山にあって飛驒の鳥類を研究した川口孫治郎氏がヲシドリ説を述べた事を採り、鴛鴦が最も万葉その他の歌にあてはまるといはれている。

○万葉集全注釈、武田裕吉著（改造社）ではスガトリは、今の何に当るか不明、五句に寝をねかねつるとあるに依れば夜鳴く鳥であろうとある。

○評釈万葉集、佐々木信綱全集(五)（六興出版社）には菅鳥。不明。海録（山崎美成）にはヨシキリのことかとある。

○万葉集新考、井上通泰著（国民図書）では菅鳥はいかなる鳥にか知らず。山崎美成の海録にはヨシキリなりと云へりとある。

○万葉集大成（平凡社）にも菅鳥も今の何にあたるか不明とある。

○万葉集評釈、窪田空穂著（角川書店）には「菅鳥」はその名伝わず、したがって不明である。菅鳥のごとくにで、菅鳥は妻恋する鳥とある。

○万葉集童蒙抄、荷田全集(四)には菅鳥一鳥ありて夜をいねず夜すがら鳴きわたる鳥などにや。又我身の事を鳥にも比して云へるにやとある。

○増万葉集全註釈(九)、武田裕吉著（角川書店）でもスガドリは今の何に当たるか不明。五句に寝ヲネカネツルとあるによれば夜鳴く鳥であろうとある。

○校本万葉集、佐々木信綱著（岩波書店）には説明されていない。

○万葉集事典、佐々木信綱著（平凡社）には菅鳥の釋川口孫治郎氏は飛驒国細江村の細堰川の鳥を調査してヲシドリと判定した。清鳥即ち美しい鳥の意で用いたのであろう。略解に「管」の誤で、管鳥（ツツドリ）かといふとある。ま

た、日本国語大辞典（前出）には、すが一どり〔菅鳥〕《名》鳥の名。どのような鳥かは未詳。「おしどり」とも「つつどり」ともいう。万葉—12・3092の歌を挙げ、〈作者未詳〉色葉字類抄「駕スカトリ音如」。夫木—17「いつかたもをなしうきねをなにとかはうらわたりするさよのすかとり〈祐盛〉」。古辞書、色葉・名義もある。

房内幸成氏は、「スガ鳥考」（1969「野鳥」270号）で川口孫治郎氏の「飛驒の鳥」（1921）「続飛驒の鳥」（1922）〈郷土研究社発行・爐邊叢書に含まれている〉の中でスガトリをオシドリとされているのを「万葉動物考」（三省堂）の著者、東光治氏が川口氏のこの説を採られた結果今日では一般にこの説が行われるようになったがはたしてそれでよいのかとの疑問を投げ掛け、類聚名義抄並びに大漢和辞典、（諸橋轍次）を基に世界的視野に立ってスガトリがハシビロガモであることを立証されている。又、細野善鬼氏は「私のスガドリ考」（1970「野鳥」280号）で日本の古典に出てくる鳥を日本語の枠の中で考え、スガドリがキセキレイであるとされている。それら諸氏の論評にそくして、スガドリは一体何鳥なのかを考えてみよう。

まず東氏が川口氏のオシドリ説に同意された説は、『すかどり、清鳥の意の「をしどり」に同じ。菅鳥に就いては古来種々の説があるがその内管鳥の誤字でツツドリの事だとする説を持つ人が多いやうである。併しツツドリでは歌意に適合しない。葦切・郭公・雨燕・鶴鶴などの諸説も根拠薄弱である。松岡静雄氏は之を一種の鳥の名とせず「菅は借字（渚処）鳥の意で、すどり（渚鳥）と同義であろう」と述べられている。万葉古今動植正名に「歌意を按ずるに上に細江とあれば水鳥なるべし、下に妹に恋ふるとあれば、姿よき美形の鳥なるべし、水鳥の美形なるものをしに踰ふるなし、さればすが鳥は上の鴛鴦を一物となすを可とせむのみ」とある。川口孫治郎氏は飛驒国細江村の細堰川の鳥類を調査してヲシドリと解釈された。ヲシドリは昔から鴛鴦の契といひ、琴瑟相和する亀鑑とされ

てゐる更にその姿の優美なることから考へても妹に恋ふると譬ふるに相応しい鳥である。歌中の細江には飛驒の国とする説と、大和国の飛驒附近とする説とがあつて、冬の歌とすればどちらでもよいが、夏の歌とすれば、その頃ヲシドリは大和の平地には見られないから、前者の説に従はねばならない。尚菅鳥は清鳥の借字で、清浄なる鳥、美しい鳥の意であろう。優美な女性をスガシメといふと同じ意味で、ヲシドリをスガトリといふは相応しい名ではあるまいか。』とある。

歌中の細江の所在を考える場合、細江を普通名詞と見るか、地名と見るかによってちがってくる。万葉（巻12・3092）の白檀（白真弓）は「引く」の枕詞で「斐太」のヒにかかる。「斐太」を大和国高市郡飛驒とか、近江国愛知郡肥田とかいった時は細江を普通名詞と見た場合で地名と見れば、高山本線の高山駅と角川駅の間、古川のほとり安国寺の西に細江という所がある。駅名にも飛驒細江と呼ばれている所がある。この川は高山市の南、水無神社の彼方に発して北流し高山の北で小八賀川と合流し角川では小島川と合して神通川となって富山湾にそそぎこむ水量豊富な川で春秋いたる処で多くの鳥たちが認められる。ここ神通川の上流は宮川と呼ばれ、飛驒高山の町の中心を流れていて、そこがオシドリの昼間の休息場所になっている。夜はドングリなどの木の実を求め町はずれにある城趾などに移っている。飛驒高山のオシドリ観察結果で春夏秋冬における自然の諸相をも伺い知ることが出来る。雪どけが始まり、コゲラ・シジュウガラ・ウグイス・クロツグミ・カツコウ・ツツドリ・ホトトギス・ジュウイチ・イワツバメ・アマツバメ・ヨタカ・オオルリ・キビタキ・キセキレイ・クイナなどを見かけられる頃にはオシドリは完全な夫婦になり、5月になると森に帰る、それは巣穴を探すため普通は杉の幹穴や樹洞を求めるのであるが、時にはムササビの巣穴を取ることもある。カツコウの鳴く頃には夫婦は別居生活にはいり雌は2週間の抱卵をする。カエデの実の大きくなる頃である。木々が紅葉し、

ホシガラスの奥山より下りるころ群をつくってシベリヤに飛び立つものいる。これが鳥の「渡り」である。「渡り」をしないオシドリは雪の降る頃寂しく夫婦で生活するが、雄の羽毛は完全にオシドリの美しさになっている。そしてアカゲラ・ツグミ・イカルチドリ・ウソ・ヤマドリなども観察できる。

オシドリの分布は、シベリヤ・中国・朝鮮・日本である。東京上野不忍の池でも見られるもののこれは秋冬で春夏は深山の森にはいるから見られない。

オシドリには「渡り」をするもの「渡り」をしないものがあるといったが、「渡り」について簡単に述べると、①留鳥・②夏鳥・③冬鳥・④旅鳥・⑤迷鳥に類別される。しかし、この類別は人為的類別に過ぎないから厳格にいうと多くの例外を見出すことができる。この「渡り」の行動の起源は食物にあるというワレス氏の説がもっとも信じられている。適者生存の理法により習慣が次第に蓄積遺伝され本能的に山を越え海を渡り数千哩の大旅行をするようになったのである。そして「渡り」の行動については古くから知られていて旧約聖書の中にもすでにタカの「渡り」について記述がある。それは「渡り」の起源の古さを実証するもので今も昔ながらの変らぬ姿で鳥たちは飛び続けているのである。

東氏の鴛鴦は勿論、根拠薄弱とされた管鳥・郭公・雨燕・鶴鴒なども観察することは容易であった。又、松岡静雄氏はスガドリを1種の鳥の名とせず「菅は借字スカ（渚處）鳥の意で、すどり（渚鳥）と同義であろう」と述べられているのについて、細野氏は『須賀は洲陸の略、洲すくが処（スカ）で、万葉の渚鳥のことである。海浜・湖岸などの砂地・川縁のことを方言でスカ・ハマスカといっているから、渚をあるいて餌をあさり、砂地にあがって仮眠をとる遊禽類特に水辺走行の鳥（チドリ・セキレイ）とされている。』この遊禽類（カモ・ガン・シギ・チドリ）も多数この地において観察できる。又、菅鳥は清鳥の借字で、清浄な鳥、美しい鳥の意である

う。優美な女性をスガシメというと同じ意味でオシドリをスガトリというにふさわしいとあるのについて、鴛鴦の俚言を当ててみると、カシドリ・カモ・コガモ・オシノトリそして、「野鳥の事典」、清棲幸保著（1966・東京堂）には、オシバト・オシカモ・ウシガモ・オシガモ・カシカモ・オモイドリ・コイドリ・カシクイ・ブンキン・ツンボドリ・ウシノトリ・ウシヌトイ・オシとあってスガドリはいない。

類聚名義抄、承安年間（1172）僧中128に、

鴛鴦 或鴛鴦如；蜀田鼠化一為一。即鴛鴦（アマトリ、スカトリ）管鳥家ハト

とあり、

大漢和辞典には、

鴛 ふうしうづら。鴛母。に同じ→〔礼、月令〕田鼠化為鴛

とある。類聚名義抄・大漢和辞典を論拠としての房内氏の菅鳥についての世界的視野の論点を誉げてみると、鴛がフナシウヅラであることはよく分らない。しかし田鼠云々が礼記の月令を出典とすることがはっきりしたもののフナシウヅラは日本に産しないのでスガトリと同じではなく、また「家ハト」とあるが、飛驒の細江のスガドリは飼鳥でなくて野生の鳥のようである。次に「アマトリ」と呼ばれる鳥はわが国には、アマツバメ・ウミスズメ・カハアイサ・ウミアイサと数種ある。このうち飛驒の細江に縁のありそうな鳥はカハアイサだけだがそれでよいのだろうか、アイサがアマドリと呼ばれる理由を述べられている。

アイサがアマドリと呼ばれるのは、これが原始信仰で天の神、空の神と崇拜されたことを暗示している。これは全世界にわたる学説の根本である。アイサ類は世界中に分布する。スガドリがアマドリと呼ばれるならばこれも天神、空の神と信仰されたはずである。これも全世界に分布するといわれ、類聚名義抄にはこの鳥が鋤（スキ）に等しいことを暗示している。一体これはどういう意味か。スキと天と何の関係があるのかと、次のように述べられている。

『空を意味する英語のsky 古形はskie, scēoで、北欧ゲルマン系に行はれてゐる。また

光 (英) shine、古形 scinan (アイスランド、スウェーデン) tkina、(独) schein、古形 skin となるので ski スキーが「光の神」とも崇拝された形跡濃厚となった。原始信仰では光の神は空の神でもある。さらにまた

美し (英) sheen 古形 scēne、(独) schön-古形 skōni (Fries) 古形 skēne と、

この ski は美の典型とも仰がれてゐる。恐らくそれは美しい生物に違いないが、美しい生物といへば鳥、そして鳥の中でも雄鴨の或る種類であろうと窺ひをつけた。また管見に入つた世界の言葉で形の似た道具の名が

ski スキー、(英) skeete (skete、skeat) 長柄のシャベル、(瑞) sked サジ、(伊) sciac-ciola コテ、(希) skeparnon 斧、(エジプト) skē 鋤、(日本) スキ ski と、世界の東西南北の極にかけ離れてもなお符節を合せるがごとく ski、ske となって「空」や「光」の ski、skē ととも一致することが確認された。類聚名義抄が暗示したやうに、アマ (ドリ) が鋤に等しいことが、全世界に通ずる言語の事実として実証されたのである。言語学史上未曾有の事態が起つたという外はない。しかも鋤に等しいアマ (天) はスガドリという鳥である。スガはスキ、スケに近い。私は先づ世界中の鴨の名称に次々に当てていった。すると果せるかな

ハシビロガモを

デンマークで skeand

スウェーデンで skodand

と呼んでゐるではないか。and は勿論「カモ」だから ske、sked はハシビロガモの原名のひとつとして全世界に通用したのである。その広い嘴の形に似る故にスキー、鋤、シャベル、斧、コテ、サジ等が世界共通に ski、skē と名づけられたのであった。言語発生の秘密がここに暗示された。言葉、物の名は神のみ名であつたのである。ハシビロガモといふ最美の鴨は最高神即ち空の神、光の神と畏敬されたのであった。

仏語 souchet (発音スーシェ) には(1)カヤツリ草即ちスゲ(2)ハシビロガモの両義がある。仏

語では他国の k 音が f (シュ) 音に変わるのでスーシェはスーケに等しい。鳥のスゲ、スガと草のスゲ、スガとの一致は日本だけではなかつた。かくて世界的視野に立ってのはじめて日本語の

スガドリ=ハシビロガモと確定されたのである。

さらに仏語 souche には、根、根本、祖先、始祖起原の意味がある。souche の原義がスガドリ=ハシビロガモなることはいうまでもない。ハシビロガモ、また色々の鴨をハジロともいう、そのハシ、ハジから「ハジメ」が生まれたのに似てゐる。独語の祖先 Ahn の原形は ana で、ana が「鴨」なることは周知の通りである。german の原義も「鴨」であつたらしい。現イタリー語 germano は「鴨」を意味する。古代エジプトでウミアイサの頭部の象形文字をもつて表される ma、me、man が根源的には、カモ、カマを意味したことが窺はれる。』

ハシビロガモ (雁鴨目ガンカモ科ハシビロガモ属) は冬鳥で秋は10月中旬から11月上旬ごろに渡来し、翌春の4月下旬から5月上旬ごろまでとどまっている。海岸・海湾・沼沢・川口・池・湿地・温地の草原・湖沼・水田・浅瀬・干潟・河川などに生息し、海岸近くや平地に多い。小群・大群で生活し昼は安全な海上・池沼・川口・湿地などで眠り、夜間に主として餌をあさるなどと「野鳥の事典」に出ている。内地では毎年11月15日から翌年2月15日まで狩猟のできる狩猟鳥のひとつである。「わが国の鳥獣」(1967・環境庁自然保護局鳥獣保護課編) ハシビロガモは雄の頭部・頸は金属光沢のある暗緑色で、頭上は黒褐色を帯び、後頸は多少羽冠をなしている。アヒルの青クビよりも美しくなく鴛鴦の雄とは比べものにならない、およそハシビロガモ (菅鳥) は清鳥の借字で、清浄なる鳥、美しい鳥とは縁の遠いものである。ハシビロガモの地方の呼名には、ヘラガモ、クチガモ、ヘラハシ、ハシガモ、モミスクイ、ナベガモ、ハシヒロ、カベガモ、クチ、ヒラクチ、ニタリ、ペラガモ、ハシブト、オオクチガモ、オオハシガモ、シロ

ハジロ、タグロ、ヒラガモ、ヒラハス、などがある。「野鳥の事典」。

次に日本の古典に出て来る鳥を日本語の枠の中で考えられる細野善鬼氏は、川口氏・東氏のスガドリのオシドリ論並びに房内氏のハシビロガモ論に対してキセキレイだとされている。

仁安2年(1167)の「歌袋」、祐盛法師の歌は游禽類であるから鴨類がうかび、オシドリ・ハシビロガモのいずれであっても格別の論をするに当らないし、仁安2年は万葉集が成った年から4世紀半もすぎた時代で、スガドリとはいっても万葉のスガドリと同日には扱かはないといわれている。それは東氏が「続万葉動物考」で、『我々が呼子鳥を論ずるに当っては、少くとも鎌倉期以後の作品は全部抹殺しなくてはならない。これらのものにこだはってゐては呼子鳥の正体は永久に不可解である。』と書かれているのと同列である。又、細野氏は類聚名義抄の「アマトリ、スカトリ、菅鳥家ハト」のことや「田鼠化してカヤクキとなる」云々は和漢三才図絵にも似たようなことが書いてあるが、鳥の漢名やむつかしい鳥の漢字はいっさい信用しない方針であって、ただひとつだけ引用をゆるしてもらいたいとして、「胡鷺子アマドリ」を説かれている。これは古俗言、唐ツバメに該当するものと思うが古事記の訳本のなかにもこれが使ってあるとして、古事記、中巻、神武東征の段を引用されている。

『胡鷺子あめつぎ鶴つづ、チドリ、マシトトなど(何故)裂ける利目(鋭い目)』というイスケヨリヒメの言葉があって、これは東征につきしたがった大久米の命みこと以下の顔にイレズミ(面裂き)がしてあるのをいぶかって、これをキセキレイやチドリやホホジロの頭部の条斑にたとえたのである。

この胡鷺子(子をはぶく場合もある)というのは大言海(くあまどり)の項によると明快にアマツバメのことであるが、この部分が原記では阿米津々という1名詞になっているのを、現代訳本では2つの鳥に分解して、いかにもアマツバメとキセキレイであるかのように誤ったので

ある。アマツバメのアマは天ではなく雨である、そしてその下につづくツツというのは杜鵑科のツツ(筒)ドリではなく、書紀にいうニハクナブリ、古事記にいうツツ、ツツマナバシラのキセキレイのことであるが、なにゆえキセキレイに断言できるかというところ、阿米津津のアメは天でも雨でもなく、また海人でもなくて、食品のアメ(飴)で、アメ色、アメ牛(黄牛)などの言葉が教えるとおりの、黄色いツツ即ち、キセキレイだからである。食品のアメもまたアマに普通するからアメツツはアマツツでもありアマドリなのでもあって、名義抄がいう「アマトリ、スカトリ、菅鳥」はキセキレイの名を3通りに説明したものともいえるのである。「菅鳥家ハト」は継ぎはぎの蛇足であろう。

するとスカトリもしくはスカドリ、スガドリは、逆にアマドリでもあるから、古事記を信用するかぎり、菅鳥は顔面に顕著な条斑をそなえた鳥でなければならず、書紀を信用するかぎり、それはイザナギ・イザナミの男女神に、トツギ(婚)の道を教えた率寝課せ(率寝をはたさせる)のキセキレイでなければならぬということになる。アマツバメやハシビロガモには顔面になんらの条斑もなく、類似音アマ(海人)ドリのアイサ類、とくに飛驒の細江に来る可能性のあるカワアイサにもそれはなく、同じく類似音アメドリのアビ、オオミズナギドリなどの海洋鳥にもそれはない。

また菅鳥は白真弓の歌で見えるかぎり、何を措いても係恋の鳥でなければならないが、アビやオオミズナギドリは、義理にも係恋の鳥とはいえない。この点川口氏のいわれるオシドリは顔面に顕著な条斑があり、代表的な係恋の鳥でもあるうえに、飛驒の細江にピッタリする……中略……名義抄に「アマトリ、スカトリ、菅鳥」と清音にあらわしてあるところを見ると、ひょっとすると当時このスカ(洲処)をナマのまま取り上げて「斐太の細江のスカトリの」と詠むつもりであったが、須賀はスカ、スガいずれにもよめるから、菅という係恋の好字をえらんだのであるかも知れない。「菅の根の長き春日を

恋ひわたるかも」や「山菅の根のねもころに」など、当時万葉でさかんに詠まれている。

係恋のことで「スガルヲトメ」というのがあり、枕詞につづいている。原字にはむつかしい漢字をつかってあるから代字で示すと腰細蜂＝ジガ（似我）パチ＝俗言スガリで、この蜂は腰（腹柄）のところが極端にくびれて胸と腹をつないでいる。これはたぶん清楚な乙女（おとめ）をあらわす意であろうが、「腰細のスガルヲトメの何何」という形でつかっている。キセキレイという鳥は、見渡したところ、ちょっと同類がはいくくらい腰細で、軽快で、清楚である。また真弓の歌そのものが読み味わうにしたがって、ますます清楚である。……中略……神話のツツ即ち、キセキレイは率寝課（いねおほ）せ一妹（いも）を率て寝るの鳥であり、古事記上巻、高志のヌナカハヒメの、「真玉手（またまで）、玉手（たまで）をし纏（も）き、股長（ももなが）に眠（い）は宿（な）さむを」でもある。……中略……キセキレイの現代方言の中にもカワラの何々というのがあって、この洲処に通じる。それを歌の中ではスガと濁らせた上は菅の字を使ったまでのことで、植物のスゲ・スガに語源上のかかわりは無いものと、私は思う。

このスガは「菅」でも「管」でも（どっちへころんでも）キセキレイである。そしてスガドリが率寝課（いねおほ）せの鳥のキセキレイであれば、本歌の主題として重要な結び、「眠を寝かねつる」の要求にも、十分に耐えうと思うのである。』

とある。アマトリについての、アメ・天・雨・海人・飴の語根説明がなされている。それは、基礎語から語根えと、全語彙の分析を進めて行くと、そこに古代日本人の持っていた諸観念の体系が姿を現わすことになる。それを吟味することによって、古代日本人の世界把握を再現することが可能となるのではなかろうかと。大野晋氏は「日本語をさかのぼる」（岩波新書）で述べておられる。万葉集に現われた、たかが菅鳥でなく、菅鳥の鳥名探究が文献国語史研究の一助ともなればと思われる。そして、類聚名義抄の「僧仲128」が、房内氏・細野氏の論拠となっ

たのではあるが細野氏のいわれる天 {ama, amē} 雨 {ama, amē} 海人 (ama) 飴 (amē) だけを対象としないで、天を空と把えて、天空 (ama) 数多 (ama) を含めてみると、菅鳥は多くの鳥・天空を飛ぶ鳥となりはしないだろうか。数多（あまた）の鳥としたら「三鳥ノ大事」の百千鳥即ち多鳥（アマドリ）となり、空を飛ぶ鳥としたら、古今伝授の「呼子鳥は一切の声ある物の惣名なり云云」の傍点をほどこした個所に適合する。そは松陰随筆・松屋筆記述べられている説とも符号する。

人が鳥の存在を認知する時、勿論鳥の飛影にもよるが、その鳴き声によって知ることの方が多い。もしそうだとすれば、空を鳴き渡る鳥・呼びあいながら飛ぶ鳥。即ち喚兒鳥で、先述したように、喚兒鳥が菅鳥ということになり、鳴きながら山麓を飛び、川辺を飛びかう鳥たちで、飛驒の細江に降りてくる多くの鳥たちとなりはしないか。しかも、喚兒鳥の兒は中国語では助辞として扱われている。大漢和辞典では、兒＝子・名詞に添える助辞とあって宋時代の詩が引用されている。一方、現代中国語にも、動詞・形容詞のあとについて名詞化したものである。（マキタバコ＝烟捲兒）日本国語大辞典には、名詞や動詞の連用形に付けて、それ・また、それをする人の意を表わすとある。（舟子・売子など）兒の使用法を漢籍中に辿れば、詩経にまでさかのぼることも可能で、動詞の下に使用されている例が沢山あるということであって、日本の文字が借用文字であるから、万葉人が、気楽に自由に借用して動詞の下に助辞として使用したかまたは無意識のうちに借用したのが喚兒鳥であったとしたら、鳴きながら呼び合う鳥達と考えても不自然さはないと考えられる。細野氏は類聚名義抄「スカトリ」についての説明でキセキレイとされ、キセキレイの方言の中にもカワラの何々というのがあるといわれている。キセキレイの別名（俗名）を挙げてみると、チンチンドリ・ツツツンドリ・イワタタキ・ケツフリ・セキレ・セキリン・ツツツンドリー・チチンドリ・チチ・チンチン・カワスズメ・カワラチッチ・ビンビン・シリタタキ・カンノンドリ・オイセド

リ・キナシタタキ・キンセキレイ・チキチン・ムギマキドリ・ズイジンドリ・シッタタキ「野鳥の事典」などが挙げられる。しかしこれら事典類には地域名が書かれていないことが多い為、方言地理学の対象になりにくい、即ち、地図読みのできないのが残念である。それでもカワラの何々と呼称されていて地域名のあるのを挙げると、

カワラスズメ（岩手県岩手郡二戸部・岩手県盛岡市付近）

カワラチッチ（岩手県九戸郡）

カワラジュマン（広島県甲斐郡）

カワラシクナギ（新潟県）

を挙げることができるものの、これを見たかぎりでは、飛驒の細江とはおよそ縁のない地方の俚言である。

本歌に返って菅鳥を考えてみると、1首の意味するところは、3句までは序の詞で、「斐太の細江に来て鳴きかわし仲間と呼びあう鳥たちのように、（それでも呼びあうことの出来る鳥たちがうらやましい）呼びあうこともできずに思う人を恋しく思っているためかわたしは眠れないのであろう」となる。もっとも1首からでは季節を推察することはできない。オシドリ・キセキレイ・ハシビロガモ説を考えなおしてみると、オシドリ・キセキレイは留鳥だから飛驒の細江のこの歌は春夏秋冬の歌であってもよい、しかしハシビロガモとなるとハシビロガモは冬鳥だから季節は限られて冬の歌となる。雁鴨科の鳥は昼は安全な池、沼、川、湿地などで眠り、夜間に主として餌をあさる習性をもつもので、日暮どきから呼びあう声を耳にする。キセキレイは昼間活動して夜は静に寝る鳥だから「眠を寝かねつる」の連想はおこらない。オシドリの場合は、湖畔や峡谷のよどみに群れ、昼は岸近い樹陰に浮かんだり水上に出た樹枝上で休み、夕暮れどきから暁ごろまで餌をあさることも多いから、歌中の菅鳥の対象と見てもよい、また細野氏のいわれるように、古事記の「胡鵲子鵲鵲、チドリ、マシトトなど裂ける利目」のイレズミがしてあるような鳥としてキセキレイ・チドリ・ホオジロ・そしてオシドリの頭部の

条斑を指すことができる。ハシビロガモはこれらの鳥ほど顕著ではない。オシドリ・ハシビロガモはその採餌の時に発する音^{おと}を菅（スカ）と聞くことが出来る。雁鴨科の鳥は上下のくちばしをたたき合わせて水とともに餌を吸いこむ音がスカスカと聞えることよりスカ鳥（菅鳥）と呼ばれるようになったとしたら初めに引用した柳田国男氏の「野鳥雑記」の傍点をほどこした一文が想起される。次にスカドリが清鳥の意のオシドリであってもキセキレイであってもよい。以上を考え合せてみると、東光治氏のオシドリ説が1番妥当のように思われる。しかし、呼兒鳥・菅鳥を何れも友を呼びあう鳥たちだとしたら、古今伝授の呼子鳥もその後の古典の書物に現われた呼子鳥も、万葉の喚兒鳥と同鳥だとして註釈することができるのではなからうか。

あとがき

「生は偶然」と云われている。野鳥たちに興味を持ち、趣味としての永い、パードウォッチング、リスニング、やがて「文学の中に探鳥」することを思いたち、そんな角度で読書するようになると、変った関心での本読みとなる。どこで生れようと勝手であっても、日本で生れ、野鳥たちを愛することの出来たのは、偶然だと思う。趣味をもつという喜び、そして持続することは私なりに価値あるものと得心している。「持続は力」だということも知り得たのである。生物たちここでは野鳥の生きざまを、つぶさに観察し「太陽のもと新しきものなし」なんて唱えてみたくなる。生物たち、それは「けものみち」「鳥のみち」「魚の棲息場所」が昔から少しも変わっていないようである。変化させたのは自然を破壊している私たち人類であって何ものでもないのである。

私はただいま「猫笑う」というエッセイを執筆中である。何時の日にか、書店であなた方と会う日の近からんことを願っている。「死は必然」と心掛けて私なりの趣味に生きようと思う昨今である。